

第15回「青山歌壇」短歌受賞作品発表

テーマ「虹」

第15回「青山歌壇」の受賞作品が次のとおり決定いたしました。おめでとうございます。初等部生から大学生、校友、教職員、学院関係者など1569名の皆様より応募いただきました。誠にありがとうございました。

最優秀賞

おおぞらにおおきなにじがかかったよはじからはじまでぜんぶみえたよ

初等部1年 ■ 檜朋果

はじめてとても大きなじのはじからはじまでみられました。ちよいといとおもったのでこのたんかをつくりました。もじのかずをあわせるのがたいへんだったので、おかあさんにおしえてもらいながら、がんばりました。また大きなじをみたいです。

選者
水上 比呂美

「おおぞらに」「おおきなにじが」という詠い出しのリズムがとてもいいです。「はじからはじまで」という表現から虹を見上げているとかさんのまん丸い目がかうかびます。

雨上がり元気をくれる虹の色ぼくもみんなの役に立ちたい

初等部6年 ■ 土屋 裕太

ある朝、家のベランダに出たら青空に虹がかかっていました。とても清々しくて、日を前向きに過ごせるプラスの力を心にもらっている感じがしました。この心でみんなを元気にしたいと思ったので、その時の気持ちを短歌にしました。受賞できてうれしいです。

選者
林 謙二

雨上がりに虹を見ると、私たちはなんだかうれしい気分になります。勇気や希望の象徴でもあります。そんな虹のような人になりたい、という下の句の素直な気持ちにひかれました。

大空にどかんとかまえた二本足なないろパワーで元気をください

中等部2年 ■ 石原 奈桜

ふと空を見上げた時、大きな虹がかかっているのを見つけて、その日一日頑張る気持ちが湧いてきたのです。その時のエネルギーシユな感じを読んだのですが、まさか賞を頂けるとは思っていなかったのもとても驚きました。

選者
日置 俊次

虹はほかないもので、すぐに消えてしまします。しかし、どかんとかまえた「なないろパワー」の虹は頼りがいがあり、作者自身のたくましさも想像されます。とても力強い歌です。

遊園地皆がおんなじ方を向く仰げばそこに雨上がりの虹

中等部3年 ■ 岡 杏奈

ある遊園地での一場面です。いつもは空を見上げない人でも、虹が出たと言われたら、思わず顔をそちらへ向けてしまうのではないでしょうか。そんな風に何かを発見した驚きや喜び、心が温まるような感じを伝えられたらと思い、作った短歌です。

選者
津金 規雄

遊園地に降り出したあいにくの雨。ちょっと手持ちぶさたでいたら、皆が同じ方を見えています。その視線の先には雨の後の虹！驚きと喜びがリズムカルな調べによく表れています。

しゃぼん玉こちらに向けて吹く君は虹の向こうにいるみたいだった

大学文学部日本文学科2年 ■ 四宮 伶

この度は最優秀賞という素晴らしい賞に選んでいただきありがとうございます。しゃぼん玉の写真を撮った際に見えた向こう側の景色の美しさに惹かれ、その景色を短歌の中で表現してみました。受賞できるとは思っておらず本当に驚きましたが嬉しいのです。

選者
日置 俊次

君が虹の向こうにいるという表現は、君という人のすばらしさや美しさを伝えてくれます。しかし手が届かないかもしれないという微かな不安も感じさせ、奥深い世界を築いています。

理事長賞

クレヨンで描いたもののほど濃くもない今日の虹にも目を細めている 大学文学部日本文学科3年 ■朝原 拓海

選者 堀田 宣彌

雨が止み雲の間より、うつすらと目に入ってきた虹は、淡い七色です。その時、ふと思い出したのは、自分がクレヨンで描いた虹色です。色の対比が上手く表現出来ています。

院長賞

しよとうぶのデッキのうえにみえたんだはじめてみたよにじのさかだち 初等部1年 ■ブリंक 智祥

選者 山本 与志春

半円形ではなく片側だけの虹が、綺麗に両足を揃えて反り返る体操選手の倒立のように見えました。初めて見つけた喜び。友達と一緒に虹を見上げて湧き上がる声が聞こえてくるようです。

初等部長賞

空のにじ見たら天しがきらきらとあせかきながらボールをなげた

初等部2年 ■鴨志田 京

選者 中村 貞雄

どうして虹はできるのだろう、とても不思議ですね。そこに登場したのが「天使」。天使が私たちのために汗をかきながら奉仕してくれています。青山学院らしい、とても夢のある作品です。

夏の空とぶよ大きなシャボン玉にじに見えたよ光は不思議

初等部5年 ■北村 有梨

選者 中村 貞雄

夏の真つ青な空に向かってフーと息を吹き込んで作る大きなシャボン玉。そのシャボン玉に映し出される虹。すぐ近くにある原風景を光のマジックにとらえたところが、すばらしいです。

中等部長賞

コロナでも奪えはしない虹が今私の上に輝いている

中等部1年 ■西川 乃愛

選者 上野 亮

コロナ禍でかけがえない時を、様々な制約の中で過ごさざるを得ない私たちですが、虹は変わることなく私たちに生きる力を与えてくれる。コロナに負けない強い意志を感じる作品です。

水やりで元気になった花たちの上にできたよ小さな虹が

中等部3年 ■長 幸村

選者 上野 亮

庭の水やりをしていると、水滴を付けた花たちはより瑞々しく、シャワーの中に見える色鮮やかな光のスペクトルとその先に見えるまぶしい太陽の光が優しい気持ちにしてくれる印象的な歌でした。

高等部長賞

ドラマはどうまくはいかぬ私生活今こそ虹が出るときなのに

高等部3年 ■落合 奈桜

選者 渡辺 健

虹によって彩りをつけてほしいその場面から、現実の世界はなかなか思い通りにならない歯がゆい思いを、上手に表現していて、素晴らしい。「今こそ虹が」が特に臨場感があります。

大学長賞

帰り道白か黒かを考えるぼくの答えは虹にまぎれて

大学文学部日本文学科3年 ■古屋 璃久

選者 阪本 浩

色彩を感じさせる作品のように思えます。映画の白黒の画面が徐々にカラーの画面に変わっていくような。「ぼくの答えは」きつと希望に満ちたものと、微笑んでしまいます。

優秀賞

空は雨お日さま出たよ見あげるときれいなにじがみんなを見てる

初等部2年 ■渡邊 蘭

七色のにじをたどってレブラコン金かを見つけていっしょにおどる

初等部3年 ■大島 幹央

水飲み場ひねる方向まちがえたわたしびしょぬれ空にはにじが

初等部4年 ■吉田 悠莉

水やりのトマトにかかるあわいにじトマトをあまくするまほうかな

初等部5年 ■岩下 将大

七色に輝く虹に話そうかもやもや気分晴れやかになれ

初等部6年 ■上杉 凌太郎

この虹が化学現象だとしても私の中ではひとつの奇跡

中等部1年 ■前田 桃華

雨模様仕方なく見るDVDディスクの裏には虹が出ていた

中等部1年 ■松山 千紘

虹色のソフトクリームあるならばいつかみんなで食べたいな

中等部1年 ■皆川 耀生

虹が今真上にあるのに気付かないみんながみんな画面を見てる

中等部2年 ■久根崎 夏輝

噴水に朝の光が差し込んでつぎつぎ出るよ虹のはた織り

中等部2年 ■母壁 広都

それぞれの色が異なる虹みたいクラスメイトもたくさんの色

中等部2年 ■宮田千壽

暑い日に車の洗車任されて一人で作ったブサイクな虹

中等部3年 ■江戸川将嗣

大人になるあふれた虹でぐちゃぐちゃのおどろぐばこも片せないまま

高等部2年 ■櫻井奏楽

雨降って地が固まって虹が出る喧嘩をしてもこれができれば

高等部3年 ■下村亮太

幼き日スケッチブックの片隅に虹色で描いた夢まだ光る

大学文学部日本文学科3年 ■松本のぞみ

あゝ夫が逢いに来たかと娘と二人大き虹みる墓参の帰り

校友 ■新井美穂子

勤務中タブレット持ち局長もオフィスの窓の二重虹撮る

校友 ■水上香葉

夢に踊つ父を見つけし時のごと雨降りの中の虹に出会えば

保護者 ■佐藤希世

総評

最後の青山歌壇となる今回、たくさんの虹の歌に感動しました。虹を見つけた喜びや、虹に元気をもらったこと、虹という不思議な現象を見て自分で考えたことなど、様々な思いが伝わってきます。DVDの裏面に出る虹や虹色のソフトクリームにも驚き、亡き人の魂とも感じられるという虹の多様性を存分に味わうことができました。短歌は本当にいいですね。人間というものは白か黒かという一色で割り切れる存在ではなく、虹のようにカラフルなのです。虹のように説明のつかない不思議さを抱えながら、カラフルに生きていければと考えます。

日置俊次

「青山歌壇」を振り返って

ポスター・チラシの顔写真

津金 規雄

元女子短期大学非常勤講師



高野公彦に師事。自身の歌集のほか「牧水賞の歌人たちVol.1」高野公彦」がある。「コスモス」選者他。

二十一年間勤めた女子短期大学で、短歌の授業を担当したのはおしまいの数年間でした。ただ青山歌壇への応募の働きかけはそれと前から、つまり卒論やら歌舞伎やら宝塚歌劇やらといった、直接短歌とは関わない授業を通して行っていました。

今回も掲載されているポスター、チラシの顔写真ですが、短大の中庭で撮影したのをよく覚えています。ところが二〇一三年から授業中にチラシを配り始めると、学生たちが顔を見合わせたり、くすりと笑いをもらしたりするようになりました。というのもその年から私は髪を伸ばし始め、かなり人相が変わってしまったからです。久しぶりに会った人たちからは「ベーターヴェンみたい」とよく言われました。毎年広報部の方からは「写真を差し替えますか？」と聞かれましたが、結局そのままに過ぎました。髪型変更は、とある卒業生との出来事がきっかけでしたが、それも含めて学院との思い出は尽きません。

短歌

登り来てまだ三合目晴れてゆく
霧のむこうに朝虹かかる

短歌

父に抱かれ虹を見たのはいつだろう
保土ヶ谷駅の跨線橋のそら

短歌のあるすてきな日々

水上 比呂美

校友(女子短期大学国文科卒)



高野公彦に師事。自身の歌集『ぎくろの水脈』『潤み朱』『青曼珠沙華』がある。「コスモス」選者他。

私は高野公彦先生の「創作短歌」の授業を受けて、二〇〇一年に短大専攻科に再入学しました。高野公彦先生から教えていただいたことは二十冊ほどのノートに詰まっています。

青山歌壇は、二〇一三年の題「本」のときから選者を引き受けました。高野公彦先生、小島ゆかり先生、そして私、短大とコスモス短歌会のおかげです。青山歌壇の審査は初等部を担当しました。みなさんの短歌を読むのはほんとうに楽しい時間でした。

これからの人生で、うれしいこと、悲しいこと、できごきすることに出会うと思います。そんなとき、青山で短歌を作ったことを思い出して、五、七、五、七、七と指を折ってみてください。はっとしたり、不思議だなと感じる心を大切にしてください。そばに短歌のある日々は、きっと豊かな毎日してくれると思います。

「青山歌壇」歴代の募集告知



第1回
2007年3月



第9回(創立140周年記念)
2014年6月



第15回(最終回)
2021年6月

三十一音で自分自身を磨き続けよう

林 謙二

中等部国語科教諭



俳句結社「葦」所属。島谷征良に師事。授業で短歌・俳句の実作指導を積極的に行っている。俳人協会会員。

青山歌壇十五回のうち、私は六回ほど選者をさせていただきました。このようにたくさんの方の短歌を読み、そして選ばせていただく機会は初めてでしたが、毎回楽しかったです。

短歌は三十一音と短いですが、その短い中に作者の思いが込められています。喜怒哀楽はもちろん、驚きや感謝や願いなど、さまざまな思いが込められています。また、一つのテーマでもさまざまな着眼点があり、表現も工夫されていました。しかし、入選作品は数に限りがあり、「すべてを選べなくてごめんなさい」と、毎回申し訳なく思っていました。入選作品はほんの一握りですが、みなさんの思いはしっかりと受け取ることができました。

短歌は思いだけでなく、作者自身をも表現する短い文学です。そして、短歌を磨くことは、自分自身を磨くことにもなります。この青山歌壇をきっかけに、これからも短歌を作り続けていただければと思います。たくさんの方の素敵な作品をありがとうございます。

短歌

七色といわれる虹のその中に
名もなき色の無数にありぬ

「青山歌壇」を振り返って



日置 俊次
日置俊次先生
朝日歌壇賞、第50回現代歌人協会賞等受賞
馬場あき子に師事。

短歌には『万葉集』以来の長い伝統があり、五音七音のリズムは日本人の心の原点となっています。また東京の青山という地は、近代の最高の歌人とされる斎藤茂吉が活躍した中心地です。

「青山歌壇」はそうした伝統の上に、これまで素晴らしい作品を生み出してきました。みなさまの作品を拝見しながら、いつも感動していました。

もともと思い出深かったのは、二〇一四年の第九回「青山歌壇」が「青山学院創立一四〇周年記念短歌コンクール」となった時のことです。初等部から大学院の在校生、卒業生、保護者まで参加できる「オール青山」の唯一の行事となり、留学生も表彰されて、その短歌の波は国際的な広がりも見せたのです。そこで入賞した歌を、何首か引用します。

「あさがおのめがでたころはちいさいけどいまはおおきいせんせいよりも（初等部1年、堀口稀唯）」「雨上がり生まれたばかりのゴーヤのめのびてお空のにじにまきつけ（初等部3年、ロス杏れいな）」「くすの木の葉つばを風が揺らしてたん生のうたうたっているね（初等部3年、イエロリースジェナ亜莉沙）」「私には何も変わらぬ毎日が地球の誰かの誕生した日」（高等部2年、福岡沙里奈）、「これが最後の誕生日になると嘆きつつ蠟燭をそと吹き消した祖母」（大学文学部日本文学科3年、黄郁婷）

短歌というのは本当にいいものですね。創立一

五〇周年を前にして、過去を振り返り、またいろいろ歌に詠んでみたくなります。

いつも充実した誌面でしたが、その陰に隠されたスタッフの素晴らしい仕事ぶりに、涙がにじむような思いを禁じえません。これまでのテーマ（題）を眺めると、第一回から順に「机」、「クリスマス」、「青」、「光」、「楽器」、「希望」、「風」、「本」、「誕生」、「緑」、「山」、「鳥」、「時計」、「卵」、「虹」となっています。

毎年、スタッフの方々とテーマを話し合うところから始めて、私がたくさん例歌を作り、その例歌を選ぶ作業も進めます。応募原稿がさまざまな場所から届きますので、その原稿を整理するのが大変です。それから歌人の先生方に選歌していただき、スタッフはその結果を丁寧に編集して、作者の写真も手配し、必要なら撮影に出かけます。スタッフはいつも学院内を走り回りながら全力で誌面を作っていました。選者のみなさま、そして何よりもスタッフのみなさまの献身的な努力によって、「青山歌壇」は支えられてきました。一つの誌面作成に、長い時間がかかっています。本当に感謝しております。

第十五回を迎えたところで、短歌より俳句がいいという声が高まり、「青山歌壇」は終了することとなりました。俳句は短くて作りやすいので、短歌よりも愛好者が多いのです。みなさまのご応募あつての文芸欄ですので、今後とも一層のご協力、ご参加をどうぞよろしく願います。

短歌

ビルの間の冷たき虹はビルよりも
透きとおり消えてゆくなり 秋も



創立140周年記念表彰式における「青山歌壇」最優秀賞受賞者表彰
2014年11月15日 ガウチャー記念礼拝堂



「青山歌壇」スタートのきっかけとなった高野公彦先生と日置俊次先生の対談『短歌への誘い』（青山学報）218号（2006年12月発行）